

西宮上ヶ原キャンパス講座

<アメリカの政治と文化>

ヘミングウェイとパリ

○講師プロフィール

小笠原 亜衣 (おがさわら あい)

関西学院大学法学部教授・学部長補佐、言語コミュニケーション文化研究科教授。博士(文学)。2010年～2011年カリフォルニア大学リバーサイド校客員研究員、ジョン・F・ケネディー図書館客員調査員。日本ヘミングウェイ協会評議員・学会誌選考委員長。

モダニズム米文学・芸術研究。最近の論文に「ヘミングウェイとパリ前衛——建築的散文、空間芸術、間身体性」(2019)、「瞬間の生、永遠の現在——“パリのアメリカ人”ヘミングウェイとバーンズの移動性」(2018)、「疾走する散文——アーネスト・ヘミングウェイ「ぼくの父さん」の映画的文体」(2018)。共著『<風景>のアメリカ文化学』(ミネルヴァ書房)、『アーネスト・ヘミングウェイ 21世紀から読む作家の地平』(臨川書店)など。

○講義概要

「セザンヌ絵画のように書く」——そんなことを言って小説を書こうとしたアメリカ人作家の師弟がいました。ガートルード・スタインとアーネスト・ヘミングウェイ。今から100年ほど前のパリでのことです。当時のパリは前衛芸術のメッカ。進取の気風に富み、世界中から集まった芸術家たちが芸術実験に取り組んでいました。そしてこれらはただ芸術の実験というだけでなく、近代化と戦争がもたらした新たな時代の世界観を反映するものでした。時代を映す芸術。そのダイナミズムをヘミングウェイを中心に考えたいと思います。

○参考文献等

金関寿夫『現代芸術のエポック・エロイク』(青土社)

アーネスト・ヘミングウェイ「二つの心臓の大きな川」『ヘミングウェイ全短編1 われらの時代に』(高見浩訳)(新潮社)

アメリカの福音派キリスト教

○講師プロフィール

大宮 有博 (おおみや ともひろ)

London School of Theology/Brunel University 修了。Ph.D.。専門は新約聖書学、アメリカ宗教史。関連する著作:『アメリカのキリスト教がわかる』(キリスト新聞社、2006年)、『シネマで読むアメリカの歴史と宗教』(栗林輝夫との共著、キリスト新聞社、2013年)、『よくわかるクリスマス』(嶺重淑他との共著、教文館、2014年)

○講義概要

宗教はアメリカを知る大きなキーワードの一つであった。それもジョージ・W・ブッシュ政権まで。誰もがそう思っていた。ところが昨年(2018年)の中間選挙の頃から、トランプ政権と福音派との間の良好な関係に焦点を置いた報道をよく目にする。あのトランプに利用されるほどの力が福音派にまだあったのだ。しかし福音派も60年代ごろから随分と様変わりしてきた。またアメリカの若者の宗教観も随分変わってきた。ここでは福音派の近年の変遷と、

トランプ政権との急速な接近の経緯を明らかにする。

○参考文献等

大宮有博『アメリカのキリスト教がよくわかる』(キリスト新聞社、2006年)、栗林輝夫『アメリカの大統領の信仰と政治』(キリスト新聞社、2009年)、松本佐保『熱狂する「神の国」アメリカ 大統領とキリスト教(文春新書)』(文藝春秋、2019年)

アメリカン・ニューシネマの政治学

○講師プロフィール

塚田 幸光 (つかだ ゆきひろ)

関西学院大学法学部・言語コミュニケーション文化研究科教授。博士。米国ハーバード大学ライシャワー日本研究所客員研究員(2015-2016)。日本映画学会常任理事、アメリカ学会評議員。

専門は映画学、表象文化論、アメリカ研究。著書に『シネマとジェンダー アメリカ映画の性と戦争』(臨川書店、2010年)、編著に『映画とジェンダー／エスニシティ』(ミネルヴァ書房、2019年)、『映画とテクノロジー』(ミネルヴァ書房、2015年)、『映画の身体論』(2011年)ほか多数。

○講義概要

1960年代後半、スクリーンには如何なる「アメリカ」が映されていたのだろうか。本講座では、ベトナム戦争の裏側で生じたアメリカン・ニューシネマを中心に議論する。特に『真夜中のカーボーイ』(1969)におけるカウボーイ表象を分析することで、そこから見えてくる性／政治学を考察する。

○参考文献等

塚田幸光『シネマとジェンダー アメリカ映画の性と戦争』(臨川書店、2010年)、越智道雄監修(塚田幸光共著)『映画で読み解く現代アメリカ』(明石書店、2016年)